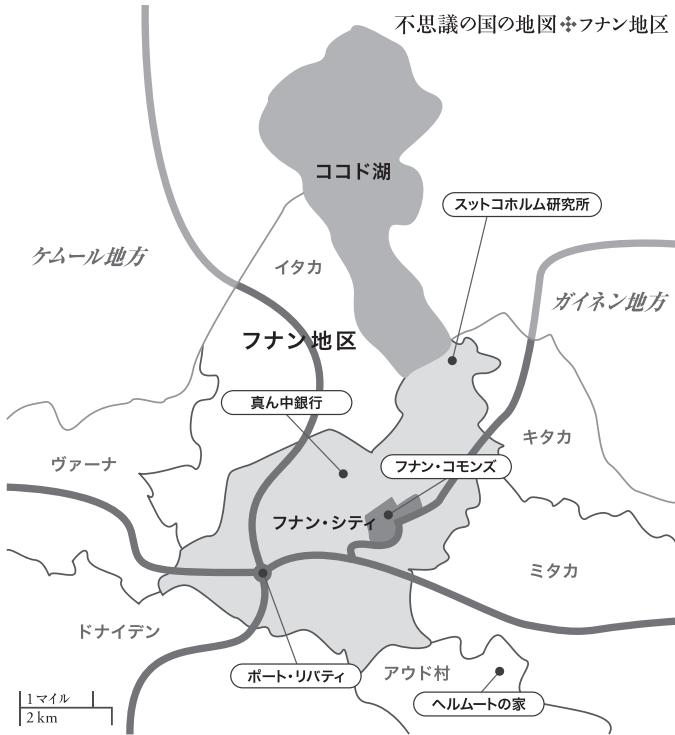


不思議の国の地図 ⇨ フナン地区



✦ 二年まえの冒険 — 007



ある朝の事件 — 014



虹色<sup>にじ</sup>のトンネル — 021

旅立ち／時間と空間のはざままで



不思議の国の夜 — 035

それぞれの夜／不思議の国の手形の話

第3章

謎の銀行

052

大都会フナン・シティへ／真ん中銀行の出現／絵本を探して

第4章

真ん中団の野望

079

団長マナカ登場／ねらわれた研究所／ commons の悲劇

第5章

ミライ望遠鏡

102

未来を見つめる／脱出！ スットコホルム研究所

第6章

不思議の国のNEO

117

フナン・アワーズ／不思議の国のお金の世界



第7章

追跡と逃亡

139

さらわれたあつちゃんこ／さらなる追っ手



第8章

レジスタンスの結成

153

シモイーダの正体／誕生、レジスタンコ！



第9章

133ミリ秒の抵抗

159

レジスタンス イス フェーティル  
RESISTANCE IS FUTILE (抵抗は無用)／  
レジスタンコ イス フェーティル  
RESISTANCO IS FERTILE (レジスタンコはどんどん生みだす)／真ん中団の崩壊



第10章

最後の対決

180

けんじゆう かも  
拳銃と鴨／再出発／共同体への帰還

✦  
終章

石油文明のあとに ————— 196

さまがわりした空、さまがわりした海／過去に学ぶ／大空のリボン

✦ あとがき ————— 220

✦ 本書に登場するキーワード解説 ————— 225

## 一年まえの冒険

『インターネットの不思議 探検隊!』より

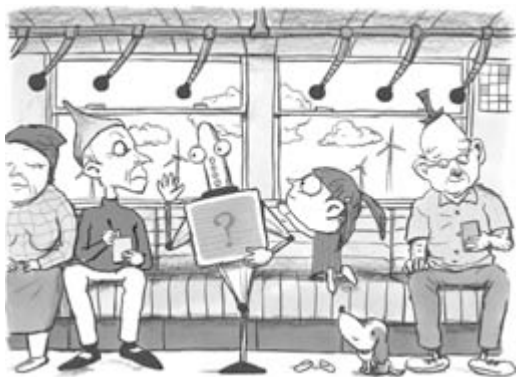
ちょっとおしゃまな女の子のあっちゃんこ、スーパーロボットのケンチャ、子犬のパピーちゃんの三人組は、あっちゃんこのお母さんといっしょに、公園のまえの小さな家で平和に暮らしていました。

ところが、ふとしたことから三人組は、地球の裏側まで一瞬で運ばれて、家にもどるための冒険の旅を始めることになってしまったのです。それは、あっちゃんこにとって、未知の世界であるインターネットの仕組みを探検する旅でもありました。

三人組は、家のまえの公園に突然現れた、黒い深い穴に落ちて、遠い知らない場所にポンッと飛びだしたのです。穴を通りぬけたショックで、ケンチャのGPS装置が壊れてしまい、三人組が現れた場所がどこなのかはわかりません。

すかさずケンチャは、インターネットを使ったビデオ電話であっちゃんこのお母さんと連絡をとりますが、あっちゃん





には、そのことが不思議でなりません。インターネットの不思議にめざめたあっちゃんこは、さっそく、「インターネットの不思議、探検隊」の結成を宣言。家に帰る方法を考えるのにそがしいケンチャをよそに、パピーちゃんをもまきこんで、不思議の解明に乗りだしました。

三人組が迷いこんだのは建国後十年ほどの新興国、不思議の国でした。そこは、インターネットが極限まで活用されていることで有名な国で、国の仕組みそのものまでもがインターネットとそっくりな国でした。なにしろ、不思議の国には首都がなく、王様も、大統領も、政治家も、官僚かんろうもいなくて、すべてのものごとはみんなの話しあいであいたいの合意が得られたうえで、実際にやってみてうまくいったかどうかで決められているという、変わった国でした。

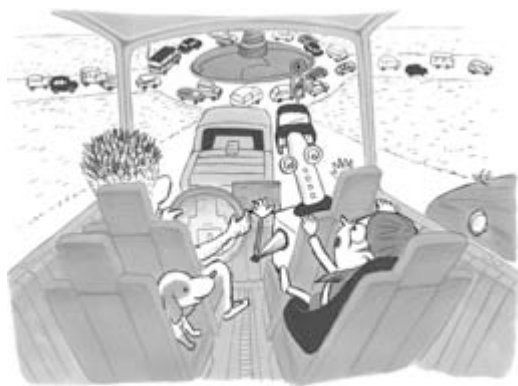
お母さんによると、不思議の国には、あっちゃんこの叔父おじさんが住んでいるとのこと、三人組は、みんなが最初に現れたヒュルン電力という風力発電の施設しせつのそばの駅から、電車でんしゃを乗りついで、叔父おじさんの待っているポンポコ駅のテケテケ出口をめざして、移動することになりました。電車賃の

心配もありましたが、不思議の国では、こどもとロボットと子犬には運賃はいらないのでした。

電車での旅をとおして、ネットワークを乗りかえて相手に情報を届けるインターネットの仕組みは、電車を乗りかえて目的地まで行く仕組みとそっくりなのだということを、あっちやんこたちは知りました。

ポンポコ駅で三人を迎えた叔父おじさんの車は、インターネットとつながる電気自動車でした。叔父おじさんの車だけでなく、すべての車がそうで、不思議の国では、石油などの化石燃料にたよらない、新しい社会がつくられていたのです。

叔父おじさんの車で、みんなは、またちょっと不思議な体験をします。まずは、信号のない交差点、**環状交差点**ラウンドアバウトです。これは、ヨーロッパなどではふつうに見られるものですが（ちょうど、パリの凱旋門がいていせんもんの周りがそうになっています）、交差点に入ってきた車が、真ん中の障害物を避けてぐるぐる回り、好きな方向に出ているようになっていきます。叔父おじさんによれば、不思議の国の人たちは、信号機に命を預けるよりも、自分たちが気をつけて危険を回避かいひすることを選ぶのだといま





す。

インターネットでも、ネットワーク自体は何も保証せず、通信している端と端ががんばってまちがいのない通信を実現しているので、インターネットと不思議の国は、真ん中ががんばらない仕組みにしている、という点でも共通していました。

そして、アメダスのようなものかわりに、たくさん車のワイパーの動きの強さの情報を集めて雨雲のかたちを描いたり、スーパーコンピュータのかわりに、たくさん小さなコンピュータの空き時間を使って天気予報をしたりといったように、不思議の国では、真ん中ががんばるかわりに、みんなの力で実際にいろいろなことが実現されていました。

真ん中ががんばらないことのもうひとつの例として、不思議の国には、決まった学校がありませんでした。子どもたちは、さまざまな職業のおとなたちから、その経験にもとづくいろいろなことを、インターネットをとおして教わっていたのです。

しかし、あっちゃんこたちの冒険の旅は、そこで大きな困難にぶつかってしまいました。車をとめて、あっちゃんこが





トイレに行っているすきに、そっくりな女の子が現れて、あっちゃんことすりかわってしまったのです。

そうとは知らず、叔父おじさんの車は、ケンチャとパピーちゃんと、そして、あっちゃんこのニセモノを乗せて行ってしまいます。

ひとり残されたあっちゃんこは、盲目もくらみで車イスの天才科学者、スットコホルム氏に助けられました。不思議の国では、すべてのものに **RFIDタグ** アイディア アイシー (無線 ICタグ) がつけられているので、目の見えないスットコホルム氏にも、周囲のようすがよくわかるのです。

そして、あっちゃんこは、スットコホルム氏から、不思議の国の建国のいきさつを教えてもらいます。不思議の国は、スットコホルム氏のような年老いた人たちが、新しい社会をつくるために世界中から集まってつくった国だったので。

自動運転する車でスットコホルム氏の家に連れていってもらったあっちゃんこは、スットコホルム氏に、半自動化された魔法まほうのキッチンを使ってじょうずにココアをつくってもらいます。自動のほうが便利なのでは？ と考えたあっちゃんこに、スットコホルム氏は、自分はキッチンの主役でありたい、料理にチャレンジしたいのだと説明します。

そこに、ニセモノのあっちゃんを連れたみんながやってきました。じつは、ストコホルム氏は叔父さんのおじいさん、つまり、あっちゃんこのひいおじいさんだったのです。そして、ニセモノのあっちゃんこは、あっちゃんこロボと呼ばれる、ストコホルム氏により開発された万能モノマネ機械でした。

みんなは、あっちゃんこロボによる「なりすまし事件」をとおして、インターネットで使われている**暗号の仕組み**について知りました。

暗号を使えば、なりすましは防げますが、もし悪い一味が同じ技術を使えば、秘密の悪い相談ができてしまいます。この点について、叔父さんは、暗号を使えば、悪い一味をつかまえるための相談を一味に知られずに行うこともできるし、技術は使う人しだいだと説明します。そして、もし政府が悪いことをしようとするなら、それに対抗できる手段をもっていることは大切なので、暗号のような技術を政府がコントロールできないようにしておくことは重要なのだといいます。

叔父さんにスパゲティをごちそうになったみんなは、翌朝、世界中から不思議の国を見学にきたり、仕事で行き来している人たちでごった返している空港から飛行機で出発します。

その直前、ストコホルム氏は、あっちゃんこに絵本の贈りものを渡します。それは、不思議の国でのあっちゃんこたちのそれまでの冒険が描かれた、『インターネットの不思議探検隊!』という名の不思議な絵本でした。

飛行機で帰ったあっちゃんたちをお母さんが迎えました。三人組は、口ぐちにお母さんにそれまでのことを報告しました。それは、みんながお母さんの車に乗って、家に帰りつくまで、えんえんと休むことなく続きました。



序  
章

## ある朝の事件

すがすがしい朝です。きょうもとてもよい天気で、公園のまえに建つ桃色の壁の小さな家では、屋根の上の太陽光発電システムの発電量が二〇〇〇ワット以上を示していました。

家のなかでは、二階のリビングの窓ぎわで、もうすぐ小学校に上がるくらいの小さな女の子が、ピラミッド型の白い箱でなにやら遊んでいます。女の子は、ピラミッドの底面が斜め上を向くように箱をゆかに寝かせて、窓からもらえる太陽の光が、箱の底面いっぱいには広がる黒いパネルにうまく当たるように、角度を調整していました。乾電池や携帯電話の充電などに使える、小型の太陽光充電器のようです。やがて、箱の側面で、オレンジ色のランプが点滅を始めました。

「あっちゃんこ、発電できたよ！ きょうもオレンジ色だよ」

自分のことをあっちゃんこ呼ぶその女の子は、キッチンで朝ごはんの支度をしているお母さんに大声で報告しました。

「乾電池三個まで充電できるんだよ」

あっちゃんこはつぎに、キッチンのおそばの壁に取りつけてある、屋根の上の発電のようすを示すパネルのそばまで行って、背伸びしてその表示を確認しました。どうやら、この家では、あっちゃんこが発電の係のようです。

あっちゃんこの家に太陽光発電システムがやってきてから、およそ一年がたちました。

約一年まえ、あっちゃんこは、スーパーロボットのケンチャ、子犬のパピーちゃんといっしょに、家のまえの公園に突然現れた黒い穴に落ちて、地球の反対側にある「不思議の国」にボンッと飛びだしました。不思議の国は、おとぎの世界の話ではなく、本当にある国の名前です。十年ほどまえにできた新興国で、インターネットが極限まで活用されていることで、世界的な注目をあびていました。あっちゃんこたちも、お母さんの弟である叔父さんや、お母さんや叔父さんのおじいさんである天才科学者ストコホルム氏の助けを借りながら、不思議の国で、インターネットの不思議をいろいろと探検することができたのです。

でも、それだけが不思議の国の特徴ではありませんでした。

あっちゃんこたちが黒い穴を通して最初に現れたのは、「ヒュルン電力」という、風力発電の施設でした。不思議の国では、自然エネルギーの活用もさかんにおこなわれていたのです。

あっちゃんこのお母さんは、あっちゃんこたちの冒険話から不思議の国のようすを知って、自然エネルギーを使った発電に興味が出てきました。そこで、あっちゃんこの家でも、太陽光発電パネルを屋根

の上に取りついたり、小型の太陽光充電器ソーラー・チャージャーを使うようになったというわけです。

朝ごはんの支度したくがひと段落つくと、お母さんはあっちゃんに話しかけました。

「あっちゃん、聞いて」

そう、あっちゃんこは、本当は「あっちゃん」なのですけれど、ちっちゃいから自分のことを「あっちゃんこ」と呼んでいるのです。

お母さんは、毎朝、あっちゃんこが目をさますまでに起きた出来事を話してくれます。このあいだは、公園に霜しもがおりて、一面、真っ白になっていた話をしてくれました。それは、あっちゃんこが起きてきたころには消えてしまっていたのですが、想像すると、とても面白そうな光景でした。

あっちゃんこは、お母さんの楽しいお話が大好きです。でも、きょうは少しうすがちがいました。ケンチャとパピーちゃんもやってきて、三人組はリビングでお母さんの周りに座りました。

「ママが朝、よくお野菜を買いに知っているのは知っていますか？」

「うん、知ってるよ」

それは、無人販売はんばいのお店でした。近所の畑で、いろんな野菜を無農薬でつくっている人が、野菜を売っているのです。

コイン一枚で買える手ごろな値段だし、なんといっても新鮮しんせんなところが気に入って、あっちゃんこのお母さんはそのお店をいつも利用していました。大根も人参も、ちゃんと葉っぱがついて売られているから、お味噌汁みそしるの具にしたり、むだなく料理に使えるのです。

「けき、買いにいったらね、めずらしくお店の人が番をしていて、話してくれたのだけど、お金を盗ま  
れてしまったんだって」

無人販売のお店なので、買いものにきた人は、自分で料金箱にお金を入れていくのですが、きのう、  
お店の人が来てみたら、その箱がなくなっていたというのです。

「どうして、お金を盗む人がいるの？」

あっちゃんこは疑問に思いました。あっちゃんこも、野菜の無人販売のお店を見たことがあります。  
棚があって、野菜がたくさん並べられています。お客さんが払っていったお金もおいてありますが、野  
菜もおいてあるのです。お金ではなくて野菜を盗んでいったら、すぐに食べることにできるので、泥棒  
はどうしてお金のほうを盗んでいったのでしょうか。

「お金があると、野菜だけでなく、自分がほしい、いろいろな物が買えるから、泥棒はお金を盗んでい  
ったのね」。お母さんは、そう言うてから、あることに気づきました。「それと、お金はだれでも使うこ  
とができるから、盗んだお金でも、買いものができてしまうのね」。

あっちゃんこのお母さんは、インターネットを使って、いろんな人が仕事をしやすくなるために手助  
けする仕事をしています。むずかしい問題を抱えた人といっしょに仕事をする人が多いので、問題が  
起こったときに、その解決のしかたを考えるのが得意なのだと、あっちゃんこは知っていました。

「だから、お金には、宛て先が書いてあればいいのよ」

「お金に宛て先？」



「小切手というの。紙に、金額と宛て先を書いて、相手に渡すのよ」

小切手を受けとった人は、それを銀行に持っていくと、コインや紙のお金にかえてもらえるのだそうです。もちろん、小切手が宛てられた本人だということを、身分証明書であきらかにしなければいけません。

あっちゃんこのお母さんは、学生のころ、アメリカ合衆国に留学していて、個人小切手をよく使っていました。アメリカでは、銀行に当座預金の口座をつくると、だれでも小切手を使えるようになります。それが個人小切手です。あっちゃんこのお母さんは、当時はお母さんではありませんでしたが、アパートの家賃を大家さんに払うときも、電気代などを払うときも、そしてスーパーで買い物をするときなども、小切手を使っていたのだといいます。

「小切手には宛て先が書いてあるので、盗まれても、盗んだ人は正しい持ち主ではないので、銀行でコインや紙のお金に換えることができないの。だから、盗まれる心配があまりないので、封筒のなかに入れてふつうの郵便で送ったりすることもできるのよ」

「んがも！」

あっちゃんこは、びっくりしたときや不思議に感じたときに、よく、こんなすつとんきょうな声をあげます。きょうは、世の中にそんなお金があるということを初めて知って、ちょっとびっくりしたにちがいありません。

すぐにあっちゃんこは、なにかを思いついたように、はしゃぎだしました。